

# ふじた看図アプローチ研究会 「ふじかん」 第28回研究会報告

今回は、対面参加6名(教員5名、大学生1名)、Web参加5名を含む計11名が参加し、ハイブリッド形式で開催しました。

前半では、看図アプローチの理論を学び合い、後半では看図アプローチを体験しました。

## ★今回のトピック★

初参加者は2名で、そのうち1名は2年生でした。授業で学習した看図アプローチへの関心から参加し、自身の学習経験をもとに意見を述べていました。とくに、普段の生活のなかで授業内容を自分の関心のある事柄や医療系ドラマと関連づけ、学習に向かう動機づけとしていると語られました。さらに、『『わかった』という納得感が得られたときに学習意欲がいっそう高まる』とも述べられ、この発言は参加者の間で印象に残りました。

## 1. 看図アプローチの理論の学び合い

テキスト『見方・考え方を育てる授業デザイナー—看図アプローチの理論と実践—』第1章第1節「看図アプローチの定義」をLTD話し合い学習法に沿って学び合いました。

ブレイクアウトルームを用いたハイブリッド形式で2グループに分かれ、LTD話し合い学習法のStepに沿って「言葉の理解」「主張の理解」「話題の理解」「知識との関連づけ」「自己との関連づけ」「課題文の評価」を行った後、ふり返りと全体共有を行いました。

話し合いでは、看図アプローチの基盤となる「見る」と「発問」を、授業設計としてどのように具体化するかが中心課題として共有されました。とくに、ビジュアルテキストや観察など、「見る」ことが中心となる場面では、「よく見てください」という指示だけでは学習者は視点を定められず、具体的な手がかりが必要であることが確認されました。また、「真剣にやりなさい」と促すだけでは動機づけにつながりにくく、「見ることの楽しさ」が立ち上がる仕掛けとして授業に組み込む重要性が話題となりました。そこで、①「見る」を具体的な手がかりとして支援すること、②学習者の主体性を損なわない発問設計により、発見の喜びを学びへ接続すること、③未経験者にも伝わるよう概念の定義・説明を工夫することの3点が確認されました。今後は、学習者が何を手がかりに見ればよいかを授業内で共有できるよう、支援の言葉や提示の仕方を具体化し、実践を通して洗練させていくことが課題となりました。



## 2. 看図アプローチ体験

今回のビジュアルテキストは、アート作品を用いました。  
変換と要素関連づけでは、写真を反転させて提示しました。

【変換】では、ラウンドロビンで「一人1語」発言し、“要素”を出しそろえました（例：砂時計／ガラス／木のテーブル／壁／影／白い布〔のように見えるもの〕／反射）。



中島和弘氏の作品「移行」

【要素関連づけ】では、「写真にある情報から、どこから撮影しているかを考える」といった問いを通して、遠近、光の当たり方、影や反射などを根拠に、それぞれが意見を述べました。「顔の影が写っているのでは？」という指摘を受け、写真の見方が一段と深まりました。全体で確認すると、その影が決め手となり、撮影位置を考える面白さが共有されました。

【外挿】では、写真から「何を象徴しているのか」「テーマをつけるなら何か」といった問いに対する意見を出し合ったあと、動きと音楽を加えた動画を視聴しました。静止画と動画のどちらでも共通していたのは、「時」を捉えていたことです。静止画の段階では「閉じ込められている／止まっている」といった読みのほか、「時は金なり」「古墳の発掘」「時が大切」など、時間の価値や重みを“大切”として捉える意見、「粟（米になる前）を箱に入れて守る」といった貴重さを“守る”意見も出ていました。

その後、動画を視聴すると、同じ作品が「止まっているもの」から「ゆるやかに流れているもの」へと見え方が変わり、テーマも「閉じ込め」から「流れ」へ、また「守る」から「癒される（砂のオルゴール）」「自然の恵み」へと変化していました。静止画では“価値”や“保存”として語られていた「大切さ」が、動画後には“ゆっくり味わう時間”として語られるようになった点が印象的でした。

ふり返りでは、「問いが変わると、同じものでも見え方が変わる」といった意見が複数ありました。あわせて「理由が“根拠のある推論”になる」「正解が限定されないことで、違いを受け止め合いやすい」といった学びが共有されました。加えて、「予想を気持ちよく裏切るようなビジュアルテキストが、対話を深める」という声もあり、ビジュアルテキストの“意外性”が話し合いを前に進めることも体験を通して確認されました。

文責：織田千賀子